The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	マンチェスターの明治期日本人留学生 : 杉浦重剛(1855-1924)の場合
Author(s)	カッソン, ニコラス・ジェームス
Citation	日本語・日本文化. 2003, 29, p. 17-45
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/4852
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

＜研究論文＞

マンチェスターの明治期日本人留学生
――杉浦重剛（1855-1924）の場合――

カッソン・ニコラス・ジェームス

はじめに

明治という時代への大きな問いの一つに、なぜアジア諸国の中で日本だけが近代化に成功したかというものがある。中国やインドなどは西欧の圧倒的な軍事力、経済力の前に屈服したが、「小さい島国の日本」だけが独立を保ち、近代的な独立国家となったからである。多くの学者がこの問題を研究し、様々な説明を試みる中で、主因の一つとしてあげられたのは明治維新前後の庶民教育の普及であった。開国前、日本には私立、公立学校、即ち寺子屋、藩校が普及していたため識字率は非常に高く、当時の西洋先進国と同水準にあった[1]。庶民教育の堅固な基盤は多くの優れた指導者を生み出し、彼等は近代化の決定的な推進力として、各分野の発展に貢献した。それ故、明治時代における指導者の気質や思想、業績に目を向けることは日本の「文明開化」を理解する上で極めて重要だと言えよう。

その指導者の中には留学経験者が多かった。それは、海外留学が幕末から明治にかけて国家の主要な政策の一つとして推進されたからである。1872 年の「学制」という新しい教育制度では条文の 3 分の 1 までが留学に当てられており、それがいかに重要であったかを示している。実際に 1868 年から 1874 年までの留学生数は約 550 人に上った。英国人作家の R.L. スチーブンソンが在英日本人の留学生に関して「どこを見ても、この異国風のさわやかで利口な学生がいる」と書いている[2]。しかし、この時代の留学の流行には、玉石混交の弊害（つまり、多くの留学生は勉強しなかったようである）と国費のむだ遣い（一人、1 年間、1,000 円位）との批判も生まれ、1873 年に日本の財政危機と学生自身の不真面目な態度のため官費制が廃止された。その後、1875 年には「貸費留学生規則」が制定され、

東京開成学校（東京大学の前身）の厳しく選抜された成績優秀な学生たちを主体とするものとなった。この制度の下で留学した学生たちの多くは帰国後、明治10年代半ば以降に各領域において、お雇外国人に代わり近代化の指導的な人材となった。

その中に杉浦重剛（1855-1924）がいた。杉浦の留学時代の勤勉さを示す一例がある。彼は父宛の手紙に「自身の学業に勉強し一身を立て好機会を得候はゞ必ず国家に報ずる有らんとする也」と書いている[3)]。杉浦は1876年から1880年まで第2回文部省留学生として当時最先端であり、産業革命の原動力ともなった英国の化学を研究した。大英帝国の産業の中心市であり、人口2,000,000人のマンチェスターのオーエンス大学（Owens College）でロスコー（Roscoe）及びショーレマル（Schorlemmer）両教授の下で化学を中心に学究生活を送った。後に紹介するように彼は在学中、数編の化学論文を発表し、高い評価を受け、成績も極めて優秀であった。帰国後、留学の目的であった化学の世界から離れ、当時創設期にあった日本の教育界に身を投じることになり、東京大学予備門長、文部省参事官及び兼官、高等教育会議議員、東亜同文書院長などを歴任した。しかし、確固とした理念を築きあげていた杉浦は国体の状況と妥協することが出来ず辞職し、以後民間にあって数々の教育、文化事業や啓蒙活動に従事した。私塾称好塾、東京英語学校、東京文学院の設立など私学教育の普及に力を注ぎ、「私は日本を世界第一流のお国にすることを以って自分の任として居る」と信じ[4)]、愛国警世の国士として活躍した。晩年には皇太子（後の昭和天皇）と皇太子妃（後の良子皇后）の御学問所御用掛を命ぜられている。また、1899年に雑誌「太陽」の読者投票で教育界の名士として福沢諭吉に次ぐ位置を占めた。彼の弟子には吉田茂、永井荷風、横山大観、岩波茂雄の他、6人もの文化勲章受賞者が名を連ねている。

本論文では、国費留学生の代表として上記のような経歴を歩んだ杉浦を取り上げ、英国マンチェスター留学時代に焦点を当てながら、その人物、思想の一端を明らかにしていきたい。

Ⅰ．マンチェスターにおける教育

杉浦自身「人物は天より降らず、地より沸かず、教育によるにあらずんば能は

ざるべし」と述べている[5]通り、この人物を理解するためには留学時代に彼が受けた教育を調べる必要があろう。そこでまず、杉浦が入学したオーエンス大学について、概観しておこう。

i．オーエンス大学

22歳の杉浦は文部省第2回留学生として化学研究のために1876年8月18日に英国に渡った。「日本のごとき面積せまく天然資源に乏しく、しかも人口増化率のはげしい国では、化学工業の奨励が最も産業能率をあげるもので、我国情に最も適切である」と考え[6]、杉浦はまずサイレンセスター（Cirencester）王立農学校に入学した。首席となったが、英国の農業は日本の農業と違って「勉強をしたからとて、日本へ帰って果たして役に立つだらうかといふことを疑ひ初めた。そこで少しく思案を変へ、純正化学を勉強して見やうと決心した」[7]。

そこで杉浦は、留学生監督正木退蔵に転校するための許可を求めた。正木は杉浦のために彼の恩師でもある英国人化学教師に紹介状を書いてもらい、杉浦をマンチェスターまで連れて行った。12月に杉浦はマンチェスターのオーエンス大学に転校した。著名なドイツ人化学者ブンゼンの弟子であるロスコー博士の下で研究することが出来、またオーエンス大学には1873年にドイツに倣って作られた英国の最新研究所が設備されていたため、杉浦はマンチェスターを留学先に選んだのである。

化学教授のロスコーは1877年にオーエンス大学のことを「忙しい人々の大学」と述べている[8]。この表現は当時のマンチェスターを反映していた。マンチェスターは重要な工業都市であったが、その工業が様々な問題を惹き起こしており、科学研究はその問題を解決する使命を負っていたのである。マンチェスターの科学的な成功の一つは杉浦が感銘を受けたドルトン[9]（1766-1844）の近代原子理論の基礎となった原子説があった。また杉浦の留学時代にはエネルギー不滅律の研究をしたジュール（1818-1889）やバルフォアー・スチュアート（1828-1887）がマンチェスターで活躍していた。そのエネルギー不滅律は杉浦の「理学宗」（後述）という精神学説に強い影響を与えた[10]。

マンチェスターにとって実践的な科学は重要であり、オーエンス大学にとって

も重要な学科であった。「科学は一般的に面白いだけでなく、地方にとっても大変重要」[11] だったのである。主にロスコーの影響で、オーエンス大学での実験的な科学は英国の大学の教育方法に革命を起こした。ロスコーが留学したドイツでは、実験を通した研究が一般的な方法であった。従って、オーエンス大学はロスコーがハイデルベルグで学んだものと同じ方法や精神で科学の教育と研究がなされた英国で唯一の大学となった。このように、彼は英国の大学で初めての実践的な化学の実験所を設立した。教育は単に机上のものであってはならない、とロスコーは信じていた。彼は「具体的な科学は知的な問いかけを常に行なう必要がある」と主張していた[12]。

即ち、ロスコーの教授方法は、学生が自分自身で発見していかなければならないという考えに基づいており、その習慣を身に付ければ生涯に亙って役立たせることが出来たのである。「オーエンス大学の創立時の評議員は次のように考えていた。教育とはいかに知識を利用するかを説くものである。知識が利用されるとすれば、それは今このときにおいて、つまり知識を扱いうる者の手によって、また知識がその恩恵を与えうる場面においてのみ利用されなくてはならないのである」[13]。このように言われているように、杉浦の留学時代には、オーエンス大学の学生の大半は学位のために勉強しているわけではなかった。彼等は実践的に勉強をしていたのであり、同様に杉浦は日本の国益にかなうことを念頭に置いて学んだのである。

次に、杉浦が深く影響を受けた恩師の一人、上述のロスコーと杉浦の関係について、紹介しておこう。

ii．ロスコーと杉浦

ヘンリー・エンフィールド・ロスコー（Henry Enfield Roscoe）（1833-1915）は1857年から1886年までオーエンス大学で化学を教えていた。ブンゼンと研究した光化学と1869年のバナジウムの単離（isolation）で有名となった。渡航前、既に名高い化学者のロスコーのことを知っていたため、杉浦は彼の下で勉強することを望み、マンチェスターを選んだ。父宛の手紙にはロスコーとショーレマーの名声について「頑児当時在オウエンス大学就魯斯古（ロシコ）及ショレマル両氏而学。皆有

名化学家。而欧亜本邦無不知其名者」[14] と書かれている。

杉浦はロスコーの第一印象を「先生は非常に大きな体格で、我国の相撲取りのごとくであるが、至極穏やかなる面で、先づ豊偉とでも形容すべき風采で、どこと無くユッタリして居らるる人であった」[15] と述べている。杉浦は教師として経験を積んだロスコーの自信に感銘を受けたようである。たとえば、あるときロスコーの実験がうまくいかないことがあったが、彼は慌てず、冷静に実験を止めて講義を続けていた。翌日、彼は一言も云わずに同じ実験を首尾よく行ない、その日計画されていた講義を続けた。杉浦はこのことに大変感銘を受けた[16]。

別の機会にロスコーの学生が講義中に机の下で密かに新聞を読んでいた。ロスコーはこれを見つけて、新聞を没収しようとしたことがある。学生たちが新聞を素早く隣から隣へと手渡した折、新聞紙が宙に舞った。ロスコーは怒りもせずに笑った。「尤も学生全体としては深く先生［ロスコー］を畏れ、又深く先生を愛して居った」[17]。杉浦が東京大学予備門長のとき、同様な事件が起きた。青年時代の夏目漱石が靴ではなく、学則に反する高下駄を履き、廊下を歩いていた。杉浦に見つけられ、漱石は杉浦の叱りを受ける覚悟をしたが、杉浦は微笑しながら、「オイ夏目、君は高下駄の面積と靴の面積のそれとを比較しとるんぢやらうネー」という冗談を言った。「その言の意外なるにおどろき且つ無限の教訓を感じて恐縮措く能はず、［中略］　漱石は当時を追想して杉浦の偉大性を激賛してやまなかつたと云う」[18]。教育家としての杉浦の性格はロスコーと類似点があったのであろう。

ロスコーは自伝で、オーエンス大学で彼の下で研究した杉浦や他の日本人の留学生について以下のように述べている。

> 明治維新直後の数年間多くの前途有望な学生たちがヨーロッパやアメリカの大学に派遣され、科学的な方法を学んだ。数人がオーエンス大学に来て私の下で化学を学ぶ学生たちと親密になった。彼等はみな非常に忍耐強く勤勉な学生であり、英国に来る前、英語を学び、直ちに講義を完璧に理解したのである。さらに彼等の才能を巧妙に発揮した。彼等は科目の詳細にも精通する能力を示し、英国人の最も優れた学生達にも劣ることはなかった。[19]

ロスコーは自伝に杉浦の写真を載せ、彼について次のように書いている。

> 杉浦という一人の日本人の学生が私の 150 人か 200 人ほどの下級学級の首席であった。彼は 3 年間、勉強するためにオーエンス大学に来たが、2 年目の試験で英国人の学生に次ぐ位置を占めた。直後に、私は杉浦がオーエンス大学を去ることになったのを聞いたので彼を呼んだ。杉浦に「ここで 3 年間、勉強するはずなのになぜ去るのか。日本から呼び出されたのか。そうでないならなぜここを去るのか」と聞いた。杉浦は「違います。自分自身で去ることにしました」と答えた。杉浦を厳しく詰問すると、彼は試験で第 2 位となって恥ずかしいから同級生に見られて堪らないということであった。[20]

「杉浦氏は嘗てマンチエストル某校に在学した時、常に首席で居つたが或時二番に落ちたのを恥ぢて、ロスコー先生の許を去った［中略］外国人に後れを取りては神州男児の名折である」という話は杉浦一生の逸話となっていたのであるが、杉浦によるとそれはロスコーの誤解であり、実際は「マンチエストルにも大分長く学んだから他に転じて聊かなりとも見聞を広くしたいと思つて、先生の許を去ったのである」。そして、杉浦の友人の増島六一郎が英国へ渡った際、杉浦はロスコーの思い違いであるとの伝言を依頼した。それを聞くとロスコーが謝ったが、後に川田正澂が英国に渡り彼に会うとロスコーは自伝通りの説明を繰り返した[21]。

これについて杉浦の弟子の猪狩史山は次のように書いている。

> 縦令自分のことでも年数を経ると記憶の薄らぐこともある。道士［杉浦］の記憶力如何に大なるにもせよ、三十年有余年前のことで、二つ三つあった中心の動機の一つ位しか覚えて居らぬこともないとは限らぬ。これに反して一方には弟子を見ること其の師に如かずというような興味がある。殊に目につく日本人で、日頃非常に敬愛した門弟の心理状態を丸で方角違いに読み誤るようなロ先生でもあるまい[22]。

これは杉浦の留学時代の最も有名な事件であり、杉浦の性格をよく示している。

自分のためだけではなく、日本のために一番になるという欲求は彼には非常に強く、二番に落ちることはこの上なく恥ずかしいことであった。その上、自分はそういう人間であることを認めない性格がこの事件でよく分かる。そのとき、杉浦はケミカル・フィロソフィーの試験では一番の成績を得て賞をもらったが、試験のためさほど勉強しなかったため、それによって慰められることはなかった[23)]。ロスコーの元を去った理由はさておき、杉浦はその頃、オーエンス大学からロンドンのサウス・ケンジントン化学校に転校した。

ところで、ロスコーは自伝で杉浦の親友である平賀義美という日本人留学生からの次の手紙を引いている。

拝呈、日本へ帰朝以来、全く御疎遠に打過ぎ何と申し訳無之候。先年オーエンス大学在学当時、先生より賜はりし篤き御指導と貴き御教訓とは、歳月を重ねて候も決して忘却仕らず、今なほ小子の記憶に新なる所に御座候。平素御左右御伺ひも仕らず候へども、先生の学界に於ける御貢献と御活動に関しては、蔭ながら敬虔の心を以て常に注意を拂ひ居り候次第にて、その御受領せられし幾多の栄位と表彰とに對しては、恰も自身の得たる光栄の如くに喜び居り候者、少くも茲に一人有之候事を御諒承被成下度候。小子は嘗て先生の門下に教を受けし事を大なる光栄と致し、之に依つて微力ながら斯学の為めに寄與し、聊か御高恩の萬分の一にも酬ひたく、只管その機會を相待ち居り候処、数年前我が文部省に於いて一の工業学校を創立し、応用化学の椅子を小子に提供せられ候につき、不才ながら色染科を擔當して以て今日に至り申候。然るに日本現時の一般染色術は、極めて幼稚にして非科学的に有之候に因り、當業者を指導啓発する為め、茲に「染色術摘要」てふ一書を著作し、今回之を上梓するの運びと相成り候に付、一部座右に敬呈仕り候。幸に小子の処女作として御笑納下され候はゞ、是に本懐の至りに不堪候。該書の内容は、固より不完全のものに有之、又著者自身にしても、未だ先生の高足中に列せられるべき資格無之候へども、今後は益々斯業の為めに奮励努力致し、以て其の理想を實現すべく覚悟罷在候尚ほ終りに臨みて、謹みて先生の御健康と御安寧とを奉祈候。恐惶頓首。

明治十九年十月一日

東京工業学校に於て

平賀義美

（旧姓名石松定）

ロスコー先生

榻下[24]

残念ながら、杉浦からロスコーへの手紙は残っていないようであるが、ロスコーの存命中、杉浦は友人や弟子が渡英する際、ロスコーに紹介したりし、あるいは便りを通じてロスコーとの交際を続けていた[25]。この手紙が杉浦自身によって書かれたものではないが、やはり手紙の内容はロスコーと日本人の留学生との関係を示す例として興味深いものである。平賀の考えや態度は他のロスコーの下で勉強した日本人留学生と同じであったと仮定しても恐らくよかろう。勿論、元の生徒は普通、形だけでも先生を尊敬するし、明治時代の言葉遣いは現代より儀礼的であったが、それにしてもこの手紙はロスコーに対して敬意ばかりだけでなく、ロスコーに与えられた化学に対する熱意をも示しているように思う。

「早くからロスコーは技術教育を他の教育分野から分けることが無駄であると分かっていた。彼にとって国の利益のために実践教育に対しても理論教育に対しても連続的に解釈することの重要性を承認していた」[26] ので杉浦がロスコーと違って化学専門の教育家ではなくても、必ずしもロスコーの影響が少なかったことにはならない。杉浦は科学が西洋の文明開化の基なので教育の基でもあるはずだと考えていた[27]。杉浦はロスコーに関して「ロスコー先生は単に理化学者として大なるのみならず、教育家として実に立派な人格を具備して居られた」[28] と結んでいる。

iii. ショーレマーと杉浦

オーエンス大学で杉浦はロスコー以外にドイツ人の化学者のカール・ルートビヒ・ショーレマー（Carl Ludwig Schorlemmer）（1834-1891）の下でも研究していた。ショーレマーは英国に渡った 1858 年に、才能のある化学者には職業の選択肢

が大変広くショーレマーの多くの同輩が実業家となったが、彼は化学に忠実であった。1861 年にオーエンス大学に入り、1874 年に英国初の有機化学の学科長（Chair）となった。杉浦がマンチェスターに到着した際、ショーレマーは既に有機化学の開拓者ならびに理論化学者として世界的な名声を博していた。1872 年にショーレマーは英国王立学士院の特別会員に任命されたが、彼は「名誉に興味がなかった。世界一謙遜な人であった」[29]。

30 年間ロスコーとショーレマーは協力者であった。ショーレマーについてロスコーは「雄弁な講演者ではなかったし、実験もうまくなかったが、彼の講義は卵のように栄養分に満ちており、彼の実験はよく好結果を生んだ」[30] と述べている。ロスコーと違ってショーレマーは痩せて中背であり、いつも薬品で焼けた汚い洋服を着ていた。独身であり、学生のように下宿に住んでいた。ショーレマーと同様に杉浦の「一生は貧乏と意気とで貫徹してゐる」[31]。杉浦はロスコーと同じくショーレマーも尊敬していた。なぜならば、上述のように、彼の学問に対する忠実さは驚くべきものであったからである。「学徒と同じく実験室に居って研究に従事し、身を以って学生の標準となされた」。杉浦はショーレマーの科学に対する探究心の例を挙げている。臭素を用いた実験の折、教室が臭くなり学生は堪らなくなり、ショーレマーとロスコーに文句を言ったが、ショーレマーは平気で実験を続けた。「この態度の真率なところは実に敬服すべき人物であった」[32]。

あるとき、杉浦は友人のクロスと実験を行なった。杉浦はクロスが実験の経過を観察している間に、20 分ほど昼食を食べに出かけていたが、彼が戻るとクロスは部屋に居らずビーカーが炎の熱のため、割れてしまっていた。杉浦はクロスがそれをしっかり見ておくべきであったと言い訳したが、ロスコー、ショーレマーは共に彼を叱った。「化学者たるものは他人に依頼してはならぬ、唯己れに依頼すべきのみだ」[33]。彼は後々までこの言葉が忘れられず、彼自身が教師となった後、生徒たちに言いつづけている。

杉浦はショーレマーの人柄について次のように述べている。

> シオーレマル先生は又一意専心、学問に熱中し、常に「学問は学問の為にせよ。Science for its own sake」といふ言葉を繰り返して居られた。どこまでも

学者的で、学生が研究の態度は己れの如くすべしといふ意気込みで自ら標準を示された。自分の如きも大いに之を敬慕し、書風までも真似た位である[34]。

杉浦はショーレマーに学んだ染物の成績がよく、賞を受けた。しかるに、1877年7月には駐英公使の井上馨に面会したとき、杉浦は染物の専門家になることを井上に進められたが、断っている。40年後杉浦は弟子に「化学成金になつたかも知らん［中略］それよりは諸君の偉くなるのを待つて、反故成金にでもならう」言っている[35]。つまり、金銭よりむしろ杉浦はショーレマーの模範に倣って「学問は学問の為にせよ」という考え方を大事にした。留学の10年後「無学の輩(はい)は(中略)直接に利益のなき事は実学に非らず抔(など)との思想を起こし動(やや)すれば俗人の瞞着せんとするの傾向なきにしもあらず」と述べるのである[36]。

iv. 留学時代の研究論文

杉浦は英国留学中に研究論文を発表して高い評価を得るとともに、ロスコーの推挙で英国化学協会（Chemical Society）の終身会員となった。発表した論文を紹介すると、次の通りである[37]。

［1］ *On Essential Oil of Sage*（香料あるいは薬用として用いられるセイジ［サルビヤ］の精油に関する）, *The London, Edinburgh, and Dublin Philosophical Magazine and Journal of Science*, Fifth Series, Vol. 4, p. 336-48 (1877). M. M. Pattison Muir（カイウス大学講師、元オーエンス大学助教授）との共同研究

［2］ *On a Slight Modification of Hofmann's Vapour-density Apparatus*（ホフマンの蒸気密度測定装置の改良について）, *Journal of the Chemical Society*, Vol. 32, p. 140-44 (1877). Muir との共同研究

［3］ *On Essential Oil of Sage*（［1］の実験において不充分な点を、さらに検討したもの）*J. Chem. Soc.*, Vol. 33, p. 292-98 (1878). Muir との共同研究

［4］ *Action of the Halogens at High Temperature upon Metallic Oxides*（高温下での金属酸化物に対するハロゲンの作用について）, *J. Chem. Soc.*, Vol. 33, p. 405-409 (1878). C. F. Cross（オーエンス大学生）との共同研究

［5］ *On Decomposition of Ultramarine by Carbonic Acid*（灰酸中にある塩酸の検

出にウルトラマリン（群青）の分解反応について），*Chemical News*, Vol. 37, p.213 (1878)

［6］ *On the Formation of Barium Periodate*（ハロゲン元素の金属酸化物の反応について），*Chem. News*, Vol.38, p.305 (1878); *J. Chem. Soc.*, Vol.38, p.118-19 (1879). Cross との共同研究

［7］ *Note on the Magnesium Vandates*（バナジン酸マグネシウムに関する研究），*J. Chem. Soc.*, Vol.35, p.713-16 (1879); *Notiz über Magnesiumvanadate*（ドイツ語版），*Justus Liebig's Annalen der Chemie*, Vol.202, p.250-54 (1880). H. Baker（オーエンス大学生）との共同研究

［8］ *Prehistoric Man in Japan*（日本における有史以前の人間），*Nature*, Vol.19, p.371 (1880)

さらに、杉浦は帰国後、一つの論文を英国の雑誌に投稿した。

［9］ *On the Isomerism of Aluminous Bodies*（動植物界に広く分布している蛋白質の一種、アルブミン類の異性体について），*Nature*, Vol.27, p.103 (1882)

Ⅱ．杉浦と留学時代の友人

1924年9月1日、日本中学校の始業式に校長の杉浦が「金蘭の交」と題して生徒に訓話した。易経に「二人同心其利断金。同心言其臭如蘭」という語があるので杉浦は親密な友人を「金蘭之友」と呼んだ[38]。その訓話に彼は「金蘭之友」の三人の名を挙げたが、その中の二人は45年前の留学時代からの友人であった。因みに1876年、留学直前に開成学校で杉浦自身は「慷慨家　近世史好　遠足好（但し無銭）詩好　漢学家　餅菓子好　不潔　短気　交際好　無産」[39]と述べている。ここでは、その性格や留学時代の日常生活が更に理解できるように友人と杉浦との関係を見ることにする。

i．チャールズ・クロス

「イギリス人は賢明ぢや。ニューヨークからロンドンへ行くと建物を見てすぐさう感ずる。個人としては誠につきあひ易いが、ネーションとしては實にずるい事をする」[40]。「金蘭の交」の訓話に外国人でも親友になれることを示すために杉浦

はC・F・クロス（Charles Frederick Cross）（1855-1935）の名を挙げた。クロスは杉浦のオーエンス大学の級友で一生涯、手紙のやり取りをしていた[41]。しかも、杉浦の知合いと生徒が英国に渡った際、クロスを訪問していた[42]。クロスは杉浦と同じ、オーエンス大学の化学専攻の学生であり、杉浦と違ってクロスは化学の専門家となった。

クロスは杉浦と同じ歳であったが、英国人であり、既にオーエンス大学で自己の立場を築きあげていたから杉浦にとって学級の頭のようであった。彼等の初対面は次のよう述べられている。

> 一体マンチェスターには日本人が行ったことが少ないので、学生たちは自分をみて、何となく軽蔑するような風であった。然るに助教授の隣の実験室に居る学生の一人クロス君が、早速自分の側に来て「君は外国人だから何かにつけて不便があるだろう。何でも遠慮なく言いたまえ、お世話をするから」と云ってくれた[43]。

杉浦のようにクロスは真面目な学生であり、二人が共同で実験して上述のように連名の研究論文を英国化学協会誌上で発表した[44]。しかし、杉浦とクロスは勉強以外の話題が豊富にあった。毎土曜日にクロスは下宿で杉浦と雑談した。クロスはキリスト教徒なので杉浦にキリスト教への改宗を勧めたが、杉浦は固く断った。同様に日本へ帰るとき、船上でフランス人のカトリック伝道者が彼を改宗させようとしたが、杉浦は断り、その伝道者と議論した[45]。「キリスト教は好まなぬ所であった。之はもとより先生少年時代に基くのであろうが、キリスト教の非合理的側面が好もしくなかったからでもあろう。」[46]

クロスと杉浦は何年間も宗教の話を続けた。手紙にクロスは杉浦に「お前の云っていることは丁度基督（きりすと）の教へと一致しているではないか。お前はそのような犠牲的精神をもっているのに、基督教の信者でないのは不思議でたまらぬ」と書いた[47]。これに対して杉浦は、神道は同化する力があり、その昔日本に来た儒教と仏教は同化し、今はキリスト教と同化した。神道と同じように日本人は幼時から養成されてきたから、キリスト教の教えに背かないことも不思議でない、と返事

する。また、クロスはナポレオンに憧れ、下宿の部屋にナポレオンの肖像が置いていたが、それについて杉浦は反キリスト教的なフランスの皇帝を崇拝することとキリストを信じることは矛盾であると批判した[48]。

彼等のもう一つの議論は、杉浦に「野蛮問答」と呼ばれたものである。この議論の発端は、クロスが生の魚を食べる国は野蛮であると主張したことにあった。議論は長く続いたが、杉浦の結論は女性が男性を軽蔑するので英国は野蛮であるということであった[49]。勿論、杉浦は英国人が女性に対して紳士的であるのは文明化した証拠であることを知っていたが、これは杉浦的な議論のようである。杉浦とクロスは「かういふ風に隔意なく、非常に心やさしく交際してゐた」[50]。彼等の関係は、議論好きであるが、「この年まで唯まけん気一つでやつて来た」[51] 杉浦の性格をよく示している。杉浦は帰国後、「英語の手紙を書くのは中々骨が折れる」と言いながらも[52]、何十年間、郵便でクロスと議論を続けていた。「あゝいふ手紙を見ると人種の相異などは忘れてしまふ」と言いながら[53]、彼のことを思い出していたのである。

ii. 市川盛三郎

留学時代の友人の中で杉浦は市川盛三郎（1852-1882）について最も多くのことを記している。しかし、市川が上述の日本中学校の訓話がされた40年前に早死したのでは杉浦の「金蘭の交」にその名を出さなかった。1877年の夏休みにロンドンで杉浦と市川は初めて出会ったが、市川は「尤もロスコー化学書の翻訳者として、嘗て君［市川］の名を聞き、又開成学校内の製作学校の教授を勤めて居られたところの君の顔も、チラチラ見受けたことはあったのである」と杉浦は書いている[54]。実際、1877年は市川の第2回目の在英留学であった。15歳の市川は1866年に徳川幕府の留学生として英国に渡ったが、幕府の学生であったから明治維新後、一度日本へ帰る必要があったのである。

杉浦が既に一年間、ロスコーの下で勉強していた1877年の秋に市川はオーエンス大学で有名な物理学者、バルフォアー・スチュアートの下で勉強を始めた。杉浦と市川はマンチェスターでの共同生活を次のように記している。「日曜などには、二人で飯を焚いたり、ロンドンから醤油を取寄せて、日本料理などを作った。

又或時プラムプッディングの大きなのを作って、其れを二人で一時に食ってしまった為、腹が張って大に困ったというような骨稽談もあった」[55]。このような事件は杉浦も普通の学生であったことを示している。ところで、杉浦には食物について三つの原則があったのである。その一つは、「第二、どんなうまいものでも決して適量を過ごさぬこと」であったが[56]、プラムプッディングの事件はこの原則の原因となったのであろうか。

杉浦と市川のオーエンス大学時代にロスコーの *Lessons in Elementary Chemistry* という化学書の翻訳（羅斯珂氏化学）が再版された。市川は文部省にその校正を頼まれ、杉浦と共同で校正した。文部省は杉浦に報酬として 100 円を支払ったが、杉浦はその金銭をそっくり父に送った。これについて杉浦は「自分は一年前から（明治十二年）聊かなれども、父に孝養することが出来た。是れ全く君の賜であって、今に至るまで、自分の深く感銘することである」と述べている[57]。この文は杉浦の性格をよく示している。孝行だけでなく、友人への礼を忘れない姿勢は感動的である。

市川は杉浦と既に一年間マンチェスターにいた頃の 1878 年の夏休み、後述の穂積陳重と河上謹一を含めて 8 人の日本人留学生とともにイギリス海峡にある島に避暑に行った。そこで村民の家に宿泊し、新鮮な魚を食べ、一年間の疲れを取った。それについて杉浦は父宛の手紙に詳しく書いている[58]。夏休みの後、杉浦はロンドンへ住み移り、市川はマンチェスターへ戻った。しかし、翌年に市川が病気になったため、彼もロンドンへ移り、杉浦の下宿に住むこととなった。市川は以前も英国留学中に病を患ったことがあったが、今回も病を患い日本へ帰ることとなった。翌年、杉浦も同じ理由で日本へ帰っている。ビクトリア朝期の英国は不健康なところであったのであろうか。市川が帰国する際、杉浦が荷造りを手伝ったのであるが、市川の部屋を非常に汚してしまった。管理人は部屋の状態に大変怒り、彼等の言い訳に耳を貸さなかった。事件後、市川は管理人に手紙を送り、管理人との関係を見事に修復させたのである。手紙の成功で杉浦は市川の「文才とウイットを見るべきである」と記している[59]。

帰国後、市川は健康を回復したようである。東京大学の物理学教授を勤めたが、再び床に伏し、1882 年 10 月、31 歳で早世した。彼の死後、門弟達は寄付金を集

め、記念碑を立てようと計画した。杉浦も相談を受けたが、彼は記念碑には賛成せず奨学資金とする方がよかろうと言った。この奨学資金を1887年に東京大学に寄付することになった。その前年、杉浦は新聞記事で「記念碑の為に寄付金を出し若しくは後世の為に寄付する抔（など）に比すれば真に有益なる寄付金にして其功徳たる實に莫大なりとす而して神佛若し霊あらば此等の人をこそ極楽往生せしむらるべし」[60]と書いた。杉浦は合理的な人物であり、情熱的な科学者であった。彼にとって記念碑などは金銭のむだ遣いであったのであろう。

杉浦は市川を深く尊敬していた。何よりも科学を尊重した杉浦は「日本に真正の科学者というものがあるとすれば、君は確かに其の模範的人物であった」と述べている[61]。教育家加藤弘之（1836-1916）は、「多くの学生に接したが、杉浦重剛と市川盛三郎との二人ほどに感服したものは無かった」とまで言うのである[62]。

iii. 穂積陳重と河上謹一

日本中学校の「金蘭の交」という訓話で穂積陳重（のぶしげ）（1855-1926）の名が挙げられている。杉浦はロンドン滞在の後期、穂積と同じ下宿に住んでいた。「終生の無二の学友河上謹一」[63]（1856-1945）もまたそこに住んでいた。杉浦と穂積と河上は貢進生として共に大学南校、そして開成学校に学んだ。1875年の夏頃から杉浦と穂積は二人の仲間と共に英国留学の運動を始めた。翌年の夏、共に英国に渡った。穂積はロンドン、それからベルリンで留学して日本人初の法学博士となった。帰国後、東京大学の法学部部長や枢密院議長を歴任した。更に、1898年の民法典の起草に尽力した。河上は東京大学の第一回留学生として1879年に文部省によって英国に派遣され、ロンドンで理財学や商法学を勉強した[64]。帰国後、銀行界の重鎮となった。杉浦は後年、河上の息子を門弟としている。

杉浦は高等数学を勉強しすぎた結果1879年10月28日に重度の神経衰弱[65]となり、河上が最初に医者を呼んだのである。11月には杉浦の療養のため、穂積と河上は学校を休み三人でヘスチングに2週間ほど転地した。実は穂積と河上は「仲わるくて困つたのであるが、此の際は二人心を合わせて看護してくれた」[66]。杉浦の看護をしながら彼等は将棋をしていたが、杉浦は仲間のうち、囲碁、将棋で最も下手であったため詩を吟じていた[67]。クロスとの交際と同じように杉浦は二

人とよく議論していた。たとえば、三人が散歩に出かけ、ヘスチング城の無花果の芽に樹脂を見つけたときのことである。雪が積もっていたため、穂積はその樹脂が寒さを防ぐために塗ってあると科学的な説明したのだが、河上はその説明がばかげていると言ったのだ。杉浦によると、この会話に穂積らしさ、河上らしさが現われている。しかし、杉浦の杉浦らしいところも出ており、彼は自慢しながら単なる自然界の現象だという「正しい」説明をする。

また暇を潰すために日本歴史上の人物を政治家、歌人、婦人などと項目に分け、三人が一番好きな人物を書いて合わせてみた。歌人として西行、婦人として源義経の愛妾の静では三人とも一致した。政治家として穂積は菅原道真、河上は鎌倉時代の武士の大江広元、杉浦は平安時代の公家の三善清行を選んだ。穂積、河上、杉浦の選択は上述の無花果の樹脂事件と同じようにそれぞれの性格を良くあらわしている。つまり、穂積は学問の神として祭られた菅原を選んだが、逆に河上は強い侍を選んだ。杉浦の選んだ三善清行は穂積の菅原の敵であり、菅原を失脚させ追放した。筆者の思い過ごしかもしれないが、杉浦は穂積を凌ごうとしたのではなかろうか。ヘスチングからロンドンへ戻るとすぐに穂積はドイツへ行き、「杉浦はからだが精神に負けた病気」[68] のため、翌年の 1880 年 3 月に留学生監督正木に帰朝の命を受け、5 月 18 日に帰朝した。

これまで述べた人々との交際が数十年も続いていたことから、杉浦にとって彼等との友情がどれほどの意義を持っていたかが分かる。また、それらの友人にとっても杉浦との友情は意義深いものであった。夏目漱石の有名な寂しい英国留学経験とは全く異なり、杉浦は真に英国が好きであったようである。「これ迄に随分送別も受けたが、ロンドンをたつ時ぐらゐ淋しい別れはなかった。この土地が一生に再び見ることが出来んかと思って」と述べている[69]。しかし夏目漱石のいた 20 世紀初期のロンドンは1870年代のマンチェスターより日本人にとって遥かに住み易い町であった。従って彼等の異なる留学経験の原因は環境でなく、それぞれの性格の違いにあるのではなかろうか。

Ⅲ．理学宗とその影響

ⅰ．理学宗

ビクトリア時代の英国人は科学と科学者を崇拝した。科学こそが英国を世界一の国としたのである。ビクトリア後期以前、英国の社会では宗教が中心的な役割を果たしたが、科学の興隆に伴って宗教の没落が始まった。オーエンス大学の哲学教授ジェビゥンスは次のように述べている。

> ニュートンがプリンキピアを書して以降、科学的な著作でダーウィンとスペンサーの著作に比肩するものはないであろう。それらが物理、精神、倫理、社会の起源に関して我々の思想の全てを根本的に改革しているからである[70]。

勿論、ダーウィンの進化論が直接宗教の没落を起こしたわけではないが、その傾向の象徴となった。1882年にニーチェは「神の死」と宣言した。杉浦が在英中の1870年代後半は、キリスト教を批判する著作が隆盛を極めていた。科学がキリスト教の基礎を揺るがしたことが問題を起こした。それは伝統的な宗教の裁可がなければどうやって社会を保護出来るのかという問題であった。宗教の信用が落ちてからも宗教に基づいた倫理と義務が社会の基礎として存続するという考えに杉浦は関心を持つようになった。特に応用数学者クリフォルド（William Temple Clifford[1845-1879]）の考えに刺激され[71]、「理学宗」（Scientific Morality）を考えるきっかけとなった。因みに、杉浦は「自然科学を理学と呼ぶ」のであった[72]。

> 自分がロンドンにゐたのは明治十二、三年のころで二十四五歳の時であつたが、そのころ宗教とか道徳とかいろいろの問題がやかましかつたが、畢竟するに、今日の学問から云へば、物理学と科学との原理で説明のできないものはあるまい。所謂迷信などといふものは段々と知識が進歩するに従つて消えて行くのである。
>
> 宗教の道がひろがつて行くには、どうしても道理を本としなければ将来の人は納得しなくなるであらう。自分はこれを物理学の定則によつて解決したいと思ひ、人事の凡てはこの物理をもつて説明し、人間はこれによつて世に

処すべきであると考へ、仮りにこれを「理学宗」といふ名称で主張したのである。今でもさう信じてゐる[73]。

上述のように、杉浦の英国留学時代には、宗教の没落が主要な論争点であった。理学の法則を用いて、宗教や倫理を説明するのは杉浦だけではなかった。たとえば、上述のジェビゥンスが次のようなことを述べている。

神学者はダーウィンとスペンサーの学説が全てを純粋に機械的、且つ物質的な原理で説明することを恐れている。彼等はその学説が神様の計画を完全に排斥すると思い込んでいるのだ。神学者は学説によって解決された問題より新たに生じた問題のほうが多いということがわからないようである。我々に神様の干渉を反証することは出来ないのである[74]。

科学者として杉浦は「人間の處世の大道も、物理上の大原則に支配されぬことはない」[75] と考えていた。留学時代の 1879 年にその思想をこのように説明する。

英語のツルース（誠）なる語は、理学上においても、社会学上においても守り本尊とする所なるは今更申すまでもなく、誰も承知のことなり。洋の東西を問はず、時の古今を論ぜずこの誠の道ほど誣ゆべからざるものなし、凡そ宇宙間の万物みなこの誠の道の外に出ること能はず[76]。

杉浦の解釈を理解するために科学原理、また杉浦がどのように科学原理をとり入れたか調べる必要がある。まず、エネルギー保存則を見てみよう。エネルギーには、運動のエネルギー・位置のエネルギー・熱エネルギー・電気的エネルギーなど多くの形態があるが、これらは相互に転換することが出来、その総和は一定である。杉浦によるとこの原理は「『蒔かぬ種は生えぬ』の諺のとほり、無から有は生じない」ということである[77]。「理学宗」でこの原理は個人や国家をも含むこの世界のすべてのものに適用される。「理学宗」においては感情さえもエネルギーの一つだと考えなければならないのである。こうして杉浦は歴史上の「何時

迄光を残す」[78] 人物がなした功績のエネルギーはどのようなものであろうかと考えた。これを説明するために杉浦は西洋の科学と東洋の儒学、易学を結合した。このように杉浦は「理学宗」という独得の思想を作り上げたのである。

杉浦はエネルギー保存則を人間の世界に応用したが、同時に東洋思想も応用した。たとえば、易の文書に「積善の家には必ず余慶あり、積不善の家には必ず余殃あり」という表現がある[79]。同様に、杉浦は日本の歴史上の天皇と大人物に与えられたエネルギーは現代日本に蓄えられていると考えた。即ち、現在の人々の活動は祖先のエネルギーによって動かされているのである。エネルギー保存則によればエネルギーの総和は一定であるから、現代日本が自分の歴史から生じた力を使うのは当然である。杉浦にとっては神武天皇から受け継がれた血筋はエネルギーの永続と同じなのである。この天皇からのエネルギーを使用するため、日本人は天皇を中心とする制度に従うべきなのである。このように杉浦は完全な国粋主義者だったのである。

杉浦は自分の考え方を証明するために、科学の原理を独自に解釈した。勿論、国粋主義者の傾向が多少見られたとはいえ、彼の思想が19世紀西洋科学の影響を受けたことは疑いようもない。杉浦はその他の分野にも科学的な考えを適用している。杉浦の「無から有は生じない」という論理は吉田松陰の教えである「知行合一」という考え方の影響を受けていると思われる。「知行合一説」とは、陽明学の実践重視の立場を示す説であり、朱子学の先知後行説が認識を実践よりも優先重視するのに対して、真の認識は実践を通じて獲得されるという見地から認識と実践を一致させる必要を説くのである。即ち、学んで得た知識を行動に生かし、行動することでさらにその知識を体得していくことである。よって杉浦は「むつかしいことを沢山知つても、それを実行しない人は、いはゆる『論語読みの論語知らず』となるのである［中略］容易なことを少し知つてゐて、それを実行すればよい。大きくすればズイブン大きいことにもなる」[80] と言っている。このように杉浦自身は研究のみに専念していたわけではない。杉浦は政教社という日本主義グループの設立者や記者、また教育家としての顔も持ち合わせていた、「今まで思ひ立つた事で貫徹せんことは一つもなかった」[81]。

教育家として杉浦は「松陰の松下村塾に学んで『まさかの時に役立つ』人物を

薫陶する」という[82]目的で日々精進していた。これもまた杉浦のエネルギー保存則、そして「蒔かぬ種は生えぬ」という方針の応用である。教育家としても杉浦は成功を収め、彼の弟子には、歌人の佐々木信綱、画家横山大観と鏑木清方、記者及び評論家長谷川如是閑、出版者岩波茂雄、作家永井荷風、中国学者鈴木虎雄、小説家及び評論家高山樗牛や、総理大臣に五度も任命された吉田茂などの「役に立つ」人物がいた。当時に教育者として杉浦は福沢諭吉に次ぐ位置を占めたのも不思議ではない。

「理学宗」の第二前提は波動説であった。波のような一高一低、一起一伏の動向は光線、音響、空気、水に見られる。人間生活にも適用が出来る。杉浦によるとこの原理は「盈(み)つれば缺(か)くる」の諺のようであった[83]。その意味は月が満月になると、次には次第に欠けていくように、人間も栄華の絶頂に達すると次には衰運になるということである。「個人や国家に見る栄枯盛衰興亡はすべていづれも波状線をなして進み行くものである」[84]。杉浦の元生徒、夏目漱石もそれに同意し、「人間活力の発展の経路たる開化というものの動くラインもまた波動を描いて弧線を幾個(いくつ)も繋(つな)ぎ合せて進んで行くといわなければなりません」と言う[85]。易経にも同じものがある。

> 例えば、乾の卦は初めは潜龍のやうに未だ『池中に在り』で顕はれないものであるが、次に見龍に移つて漸く顕はれ、九五に至つて『飛龍天に在り』といつて最上の地位に達し、終りには『亢龍悔あり』といつて下へ降る象を示すのである[86]。

このように西洋の科学と東洋の哲学との結合は杉浦の「理学宗」の特徴である。

「理学宗」は、思想家としての杉浦にも、教育家としての杉浦に対しても極めて重大な役割を果たした。従って、「これ何よりも尊い留学の御土産である」[87]と言えよう。当時、英国で問題となっていた科学の興隆に伴う宗教の没落、そしてそれに対する杉浦自身の科学者としての立場が彼をそのような考え方に到らせたのである。「本でも作ろうとするならば、今日の学者先生のようだと大きな本でもこしらえたのだが、自分はそういうことはできない。ただそういうことを信じそ

ういうことを実行してきたのである」[88]。しかし、1887年に出版された「日本教育原論」において杉浦は「理学宗」の説明をしている。そこでは、それらの科学における問題の解決法が杉浦自身の思考法にいかに影響を与えたかを知ることが出来る。たとえば、杉浦が強く主張した科学研究に対する姿勢と国粋主義がそうである。

ii．杉浦と科学研究

上述のようにオーエンス大学は英国で研究を主目的とする最初の専門大学となった。故に杉浦自身もロスコーの下で研究を目的として化学を学んだのである。英国化学協会に入会するための条件は独自の研究をすることであり、杉浦は精力的に研究を行い、数編の化学論文を発表した。杉浦はロスコーの研究を主目的とする教育に大いに賛同し、自分の生徒にも薦めていた。「何事でもさういふ筈がないといつて排斥するものぢやないよ。それが scientific investigation となつて、筈があるやうになるんぢやから」と述べている[89]。

研究者として杉浦は「電鉄電信等の實学を修べし抔とんでもなき事を主張するもの」、即ち「直接に利益のなき事は實学に非らず」と思っている人を責めた。オーエンス大学に「学識の遂行は直接に使用の考慮をいれてはいけない」という原理があった[90]。杉浦はその原理に賛同し、「非常の耐忍と労力を費して一身を犠牲にするの士を重んずるを知ら」ない人を「不逞の輩」と呼んでいる。そして「欧州諸国に於ても国威を外国に輝かし開明の度の高き国々を見れば其理学上の研究の如きも實業上の事と駢進し決して外相を粧ふて虚勢を張るに止らず」と述べる。杉浦は当時の大多数の日本人と違い、実体験に基づいた意見を表しており、その『学問論』では「夫の児戯手品の如く見ゆる理学者の事業こそ眞に鉄道電信等の如き文明要具の母」と結んでいる[91]。

また、この論文では自らの主張を下支えするためにヨーロッパの例に言及し、それは文明開化の模範であり、大日本帝国もヨーロッパと同様のことを行なうべきだと述べている。ただし、その場合にも「余は西洋の長を採りて我の短を補ふと同時に、我の長を長じて我の短を補ふの必要を説く者なり」という思想が貫かれていた。

iii. 杉浦と国粋主義

杉浦は「西洋近代文明を留学によって養った多くの留学生の中で、逆に国粋主義に基づくナショナリズムに目覚めていった人物の代表格である」と言われている[92]が、杉浦の主張していた国粋主義とは強硬な国権主義というよりむしろ「有機体的国家観」[93]であった。即ち、日本文化が多元論的な世界文化の一部を成すという思想であり、そしてその世界文化の中で日本文化も重要な役割を果たすというものである。杉浦の合理的な思想では日本の短所を補うために西洋の長所を採りながら日本と日本文化の長所を守るべきであった[94]。即ち、杉浦によると当時流行していた西洋の全てが日本より優れているという考え方は間違っていた。故に彼は1880年代、西洋文化に基づいた近代化や日本の劣等を認める条約改正に反対した。しかし、杉浦は西洋の文化や思想の全てに反対したわけではなく、要するに、杉浦の態度はバランスを保とうとするものであった。

杉浦は日本の問題点を議論することは日本のみならず、外の世界をも知ることであると感じていた。つまり、ある一つの立場からのみ物事を見つめることにより過ちに陥るのであるから「日本のみを知つて世界を知らなければその思想は独善におちいりやすく、世界を知つて日本を知らなければその行動は卑屈に惰するのである」[95]。彼は西洋のことについて何一つ知ろうとせず、ただ盲目的にそれを排除しようとするナショナリストも「一も西洋二も西洋百事皆西洋にあらずんば不可」[96]と主張している洋癖者も激しく非難したのである。

杉浦はこの地球上では異なる環境においては本来異なる生物が繁茂している事を知っていた。杉浦の見解によれば、人間も同じである。日本において独自の文化が栄えたのは至極当然のことなのである。「西洋の学問をとり入れるには、直訳と翻訳と区別しなけりやいかんといふ事は早くから言つとる事ぢゃ。鉄道や電信は直訳でもいいが、農業となるとそれぢゃいかん」と述べている[97]。これを説明するように「日本教育原論」で杉浦は自身の留学生活から得た農業についての見解も示している。英国で行なっている乾田の農業と日本で行なっている水田の農業は違う。乾田は英国の地理や気候に相応しく、水田は日本の地理や気候に相応しいからである。乾田は日本に適っていないためそれを日本で採用しようとすれば無理がある。よって、杉浦は同様に西洋の食生活の真似や英字の採用が日本の

現状に相応しくないと議論している[98]。

杉浦の見解には間違いなくバランスがある。なぜ杉浦がこのような態度を取ったかというと、何年間も海外で暮らし、外国人と交際していたからである。杉浦は森有礼のような欧化主義思想から遠く離れていたが、森を暗殺した超国家主義者とも同程度の距離を保っていた。西洋も日本も経験し、理解した者でなければ、このようなバランスのある態度をとることは出来ない。まさに、英国留学が教育家としての、そして思想家としての杉浦に強い影響を与えていたのである。

結び

杉浦は「譬えば日本固有の台木に、西洋文明の継木をされたものと申してもよい」[99]と表されるほど、英国留学経験に非常に強い影響を受けた。杉浦の晩年の座談録では何度も40年以上前の「洋行中」[100]や「マンチエストルに居る時」[101]のことが言及されている。その中には、「よく夢で出遭つてゐる」クロス[102]、「今日でも矢張り何事かあると、此の両人は先づ第一に力になつてくれる」穂積と河上[103]のこともよく出てくる。また、留学時代には晩年再び彼を苦しめた精神衰弱も患い、それは杉浦の一生に大きな影響を与えることになる。

杉浦については「英国留学後、化学を捨て」と言われているが[104]、彼自身は最後まで自分が「ケミスト」であるという自覚を持っていたようである[105]。英国で考案した「理学宗」を通じて、杉浦の留学経験は彼の帰国後の行動に影響を与えた。たとえば、杉浦は国粋主義者ではあったが、バランスの取れた態度をとることに務めた。つまり、彼の日本主義は化学の研究によって深められた西欧の科学的合理主義に裏付けられていたのである。ロスコーとショーレマーの影響を受け、杉浦は西洋の科学を用いて自分の思想の証明を試みた。この合理的な考え方と西洋の体験で得た知識によって、杉浦は日本の問題点を議論することは日本のみならず、外の世界をも知ることであると考えるようになった。彼の思想によると、日本の文化、伝統は日本人に最も適切なものであり、それを日本人には不適切な西洋文化から守り、進展させるべきであると信じていた。杉浦の「日本精神」、「日本教育原論」、「神論」などのエッセーを読むと、留学時代の影響がはっきりと見える。その著作の核心は、人事も物理の定則から離れることが出来ない、とする

理学に基づく徳育論であり、物理の原則を人事に応用した応用理学の立場をとっている。

杉浦の物理学に基づいた思想では「実行が肝賢」[106] であり、彼は「政教社」という日本主義グループの創立者や記者として、自らの思想を実践した。政教社は井上馨や大隈重信による条約改正に反対する運動の一部として組織された。そのとき、杉浦は大隈に気狂のような人と言われる。20年後、杉浦は同様に外人土地所有問題に反対し奔走した。

また教育家としても自らの思想を実践する杉浦は科学に基づく自分の徳育論を教えるために、私立学校を創立した。オーエンス大学は「社会の健康、人間の発展のための必要な手段」[107] として建てられたように、杉浦の教育家としての目標は、日本のため「まさかの時に役立つ」人材を育てることであった。前述のように、吉田茂、永井荷風、横山大観、岩波茂雄などは杉浦の創立した学校の出身である。このように、杉浦は上述の目標を達成したと言える。これらの成功を収めたことにより、杉浦は当時の教育界において、高く評価されており、従って、晩年に杉浦が東宮御学問御用掛を命じられたのは意外ではない。昭和天皇が科学研究に興味を持ち、儒学倫理に精通していたのは、おそらく杉浦の影響であろう。

間違いなく、ロスコーとショーレマーの下での研究が教育家、そして思想家としての杉浦に強い影響を与えており、彼の行動規範は、西洋の科学的な思考に少なからず基づいていたのである。杉浦は強く日本を擁護したが、彼の見解には間違いなくバランスがある。何年間にも及ぶ海外での生活、そして外国人との交際こそが杉浦に彼特有の態度を取らせたのである。彼は西洋と日本、両者を経験し、理解した人物であったため、前者から得た知識を用いて後者を見直すことが出来たのである。最後に、杉浦の思想や留学の影響について、杉浦が1887年に詠んだ和歌を通じて結びとしよう。

敷島の　大和心を　種として
　　読めや人々　異国の文

註

1) Ronald P. Dore, *Education in Tokugawa Japan*. Routledge & Kegan Paul, 1965. 松居弘道訳『江戸時代の教育』岩波書店 1970 年
2) Robert Louis Stevenson, *Familiar Studies of Men and Books*, Ch. V - Yoshida Torajiro
3) 大町圭月・猪野史山『杉浦重剛先生』杉浦重剛先生顕彰会 1986 年 154 頁
4) 猪狩史山・中野刀水『杉浦重剛座談録』岩波書店 1941 年 177 頁
5) 杉浦重剛『杉浦重剛全集 2 巻』杉浦重剛全集刊行会　1982 年 228 頁
6) 藤本尚則『国師杉浦重剛先生』石川哲三 1988 年 66 頁
7)『杉浦重剛先生』129 頁
8) H.B. Charlton, *Portrait of a University*. Manchester University Press, 1951, p. 1
9)『杉浦重剛全集 1 巻』杉浦重剛全集刊行会 1983 年 883 頁
10)『国師杉浦重剛先生』74 頁
11) *Portrait of a University*, p.30
12) *Portrait of a University*, p.65
13) *Portrait of a University*, p.37
14)『杉浦重剛先生』156 頁
15)『杉浦重剛先生』130 頁
16)『杉浦重剛先生』123 頁
17)『杉浦重剛先生』132 頁
18)『国師杉浦重剛先生』92 頁
19) *The Life and Experiences of Sir Henry Enfield Roscoe*, Macmillan, London, 1906, pp.113-114
20) *Life and Experiences of Sir Henry Enfield Roscoe*, p.114
21)『杉浦重剛先生』136-137 頁
22) 杉浦重剛『知己八賢』博教堂 1914 年 76-77 頁
23)『国師杉浦重剛先生』53 頁
24) 秋山廣太『平賀義美先生』丁酉倶楽部 1934 年 83-85 頁
25)『国師杉浦重剛先生』54 頁
26) *Portrait of a University*, p. 70
27)「理学教育の方針」『明治文学全種第 37 巻、政教社文学集』筑摩書房 1980 年 120 頁
28)『杉浦重剛先生』135-136 頁
29) *Karl Marx/Friedrich Engels – Werke* Vol. 22, Karl Dietz Verlag, Berlin, 1972, p.315
30) *Life and Experiences of Sir Henry Enfield Roscoe*, p.107
31)『国師杉浦重剛先生』214 頁

32)『杉浦重剛先生』133 頁
33)『杉浦重剛先生』134 頁
34)『杉浦重剛先生』136 頁
35)『杉浦重剛座談録』172 頁
36)「学問論」『讀賣新聞』1886 年 3 月 6 日
37) 藤井清久「英国留学時代の杉浦重剛」『科学史研究』第 2 期第 7 巻 87 号岩波書店 1969 年 158-61 頁
38)『国師杉浦重剛先生』57 頁
39)『杉浦重剛先生』185 頁
40)『杉浦重剛座談録』81 頁
41)『杉浦重剛座談録』48 頁
42)『杉浦重剛座談録』50 頁
43)『杉浦重剛先生』131 頁
44)『杉浦重剛先生』138 頁
45)『杉浦重剛先生』151 頁
46) 小松道雄「理学宗――杉浦重剛先生に於ける科学と宗教の問題」『回想杉浦重剛 その生涯と業績』杉浦重剛先生顕彰会 1984 年 228 頁
47)『国師杉浦重剛先生』51 頁
48)『国師杉浦重剛先生』50 頁
49)『杉浦重剛先生』147 頁
50)『国師杉浦重剛先生』50 頁
51)『杉浦重剛座談録』179 頁
52)『杉浦重剛座談録』131 頁
53)『杉浦重剛座談録』80 頁
54)『杉浦重剛先生』141 頁
55)『杉浦重剛先生』141 頁
56)『国師杉浦重剛先生』416 頁
57)『杉浦重剛先生』143 頁
58)『杉浦重剛先生』158-159 頁
59)『杉浦重剛先生』144 頁
60)『讀賣新聞』1886 年 3 月
61)『杉浦重剛先生』145 頁
62)『杉浦重剛先生』146 頁
63)『国師杉浦重剛先生』574 頁

64）渡辺　實『近代日本海外留学史』講談社 1977 年 429 頁
65）『杉浦重剛先生』148-150 頁
66）『杉浦重剛座談録』17 頁
67）『杉浦重剛座談録』127 頁
68）『杉浦重剛座談録』148 頁
69）『杉浦重剛座談録』68 頁
70）*Portrait of a University*, p.65
71）『国師杉浦重剛先生』63 頁
72）『杉浦重剛先生』171 頁
73）『国師杉浦重剛先生』76-77 頁
74）*Portrait of a University*, p.65
75）『杉浦重剛座談録』70 頁
76）『国師杉浦重剛先生』78 頁
77）『国師杉浦重剛先生』74 頁
78）「科学より見たる神道」『杉浦重剛全集 2 巻』423 頁
79）『国師杉浦重剛先生』76 頁
80）『国師杉浦重剛先生』77 頁
81）『杉浦重剛座談録』100 頁
82）『国師杉浦重剛先生』576 頁
83）『杉浦重剛先生』161 頁
84）『国師杉浦重剛先生』76 頁
85）夏目漱石『私の個人主義』講談社 1978 年 59 頁
86）『杉浦重剛全集』2 巻 87 頁
87）『杉浦重剛先生』161 頁
88）『国師杉浦重剛』582 頁
89）『杉浦重剛座談録』119 頁
90）*Portrait of a University*, p.56
91）『学問論』讀賣新聞 1886 年 3 月 6 日
92）富田仁編『海を越えた日本人名事典』日外アソシエーツ、1985 年 323 頁
93）『杉浦重剛全集 1 巻』995 頁
94）『国師杉浦重剛先生』100 頁
95）『国師杉浦重剛先生』73 頁
96）「洋癖者流を警戒す」『東京朝日新聞』1897 年 8 月 1 日
97）『杉浦重剛座談録』84 頁

98)「日本教育原論」『明治文学全種第 37 巻、政教社文学集』114 頁
99)『杉浦重剛先生全集』滋賀県教育会編、1945 年 627 頁
100)『杉浦重剛座談録』61 頁
101)『杉浦重剛座談録』148 頁
102)『杉浦重剛座談録』80 頁
103)『杉浦重剛座談録』18 頁
104)「英国留学時代の杉浦重剛」『科学史研究』第 2 期第 7 巻 87 号 158-61 頁
105)『杉浦重剛座談録』139 頁
106)『杉浦重剛座談録』179 頁
107) *Portrait of a University*, p.13

〈キーワード〉杉浦重剛，理学宗，マンチェスター，オーエンス大学

A Meiji Era Japanese *Ryugakusei* in Manchester: Sugiura Jugo (1855–1924)

Nicholas James CASSON

During the nineteenth century, most of Asia was overwhelmed by the economic and military superiority of the West. Only Japan was able to avoid this fate and become a modern independent nation. One theory explaining this is the spread of education across Japan by the end of the Edo period; from this base came many who went on to become a decisive driving force in Japan's "enlightenment". Amongst them were many who had spent time as *ryugakusei* in the West. One was Sugiura Jugo (or Shigetake) (1855-1924), who studied in Britain from 1876 to 1880. He became an educator and nationalist thinker; his students included Nagai Kafu, Yokoyama Taikan and Yoshida Shigeru. Later, he was tutor to the Crown Prince (Emperor Hirohito) and Princess. In Britain he studied chemistry and his study of Western science had a deep effect on him: in his writings, this influence can be seen clearly: he believed that all things, including human affairs, are subject to the laws of science. In this paper, I intend to take Sugiura as an example of a Meiji-era *ryugakusei* and look at his time in Britain in detail.